

座長：林 道夫 (NTT 東日本関東病院 糖尿病・内分泌内科)
共催：大正製薬株式会社

ES スマートフォンを用いた糖尿病の眼科診療と眼科紹介のコツ

清水 映輔

慶應義塾大学医学部 眼科学教室 / OUI Inc. 代表取締役

糖尿病には、様々な眼科的合併症が報告されており、内科と眼科の間での連携が患者の Quality of vision (QOV) 向上に不可欠である。また、診療連携において、近年スマートフォン(スマホ)などのIT機器が注目されている。

本セミナーでは、糖尿病症例における内科-眼科間の診療連携強化を目的とし、既に医療機器として登録されているスマホタッチメント型機器や、診療連携プラットフォームを用いた糖尿病診療について紹介する。さらに、適切な時期やフォローアップのタイミングなど、各種エビデンスをもとに提示し、眼科紹介のコツを共有することで、内科-眼科間の連携強化を行い、糖尿病症例のQOV向上を目指す。

また、診療連携強化を行うことで、糖尿病症例の4割を占めると言われている「放置群」(健診等で糖尿病と指摘されたが、受診しない、あるいは受診しても治療しない群)の受診機会を増やすことができる。と期待できる。

糖尿病の眼科的な合併症は、失明に至る糖尿病網膜症や黄斑浮腫、白内障、虹彩炎、ドライアイ等、様々なものが知られている。

特に糖尿病網膜症は日本人の失明原因の第3位に挙げられ、日常の糖尿病診療とは切っても切れない存在となっている。他にも白内障やドライアイなど、いわゆる前眼部の疾患も合併する。これら前眼部疾患の特徴は、視力低下や異物感、乾きなど日常生活に直結する症状であり、QOV 向上の観点より重要である。これら眼科的合併症はすべて早期発見早期治療が重要であり、定期的なフォローアップにより改善が期待されるため、内科-眼科間の診療連携が非常に重要となってくる。

眼科は画像診断が不可欠であり、前眼部疾患であれば細隙灯顕微鏡を用いた前眼部画像を、眼底疾患であれば眼底カメラを用いた眼底写真が主な診断根拠となる。IT 機器が発達した現代において、スマホを応用した前眼部診察を行う医療機器が存在し、診療連携強化の一翼を担う可能性がある。

略 歴

2013年慶應義塾大学医学部卒、眼科専門医・医学博士(同大学で取得)。東京医療センター、東京歯科大学市川総合病院、慶應義塾大学病院などに勤務。現在、慶應義塾大学医学部眼科学教室特任講師。眼科医として、ドライアイや眼アレルギーを専門とし、特に自己免疫疾患関連の重症ドライアイに関して多数の臨床研究や基礎研究の実績をもつ。また、ベトナム無料白内障手術ボランティア活動をきっかけに、医療現場の課題を発見し、帰国後に、安価で誰でもどこでも眼科診察が可能な「Smart Eye Camera」を発明、学術化の後に医療機器として、実用化に成功。次なる手として、前眼部の眼科診断AIを世界に先駆けて研究を開始している。2020年 国際失明予防協会 The Eye Health Heroes award・第十四回日本シェーグレン症候群学会奨励賞・2018 ARVO/Alcon Early Career Clinician-Scientist Research Award 等受賞。